

ACE

Act and Communicate in English

第14号

特集

子どもの伝えたい気持ちを高める授業づくり

「英語で伝えたい」という気持ちはどう育つか

物井尚子

「伝えたい」「伝えられそう」「伝わった」を育む授業

来住野実咲

Tips for Activities!

「子どもたちが夢をもって中学校へやってくることをめざして」

赤枝康隆

小学校英語 Q&A

「ふりかえり」の指導

増淵真紀子

世界の風景

マデイラ島 (ポルトガル)

ERIKO



「英語で伝えたい」という気持ちはどう育つか

外国語の授業では、子どもが「伝えたい」と思えることが大切です。どのような働きかけや授業の工夫が、その気持ちを高めるのでしょうか。理論的な視点から、その手がかりを物井尚子先生にご紹介いただきます。



物井尚子(ものい・なおこ)

千葉大学教育学部教授。千葉大学教育学部附属小学校特命教諭。テンブル大学大学院博士課程修了。教育学博士 (Doctor of Education)。専門は早期英語教育、学習者要因の研究。著書に『小学校で英語を教えるためのミニマム・エッセンシャルズ』(共著、三省堂)、『[動画でわかる] 英語授業ハンドブック (小学校編)』(編著、大修館書店) など。

1. はじめに

英語の授業で、子どもたちが「英語で自分の気持ちを伝えたい」と思うことができたならば、その授業は大きな一歩を踏み出していると言えるのではないのでしょうか。日本語で生活することにほとんど不自由がなく、生成 AI や便利な電子機器に囲まれている子どもたちに、どのようにして

英語を使ってコミュニケーションをしたいという思いを抱かせることができるのでしょうか。本稿では、L2 Willingness to Communicate (以下、L2 WTC) という第二言語 (L2) 習得研究における概念を手がかりに、そのヒントを考えてみたいと思います。

2. L2 WTC—英語で「話したい・伝えたい」と思う心理とは

子どもが英語で伝えようとするかどうかは、語彙や表現の知識の有無だけで決まるわけではありません。MacIntyre et al. (1996, 1998) は、L2 WTC という概念を示しました。これは、「第二言語でコミュニケーションを行う自由が与えられている場面において、特定の人、あるいは集団に対して会話しようとする意志」と定義されます。つまり、L2 WTC は、実際に英語を使う直前に働く「話してみよう」「伝えてみよう」という心理的な傾向を捉える概念です。

この概念の重要な点は、子どもの英語使用が、英語力だ

けでなく、自信、動機づけ、不安感などの情意的要因と深く関わっていることを示している点にあります。私が 2015 年から取り組んでいる日本人小学生を対象とした調査でも、L2 WTC には、自分の英語力に対する自信、英語学習への動機づけ、不安感が大きく影響することが確認されています。したがって、子どもの「伝えたい気持ち」を高めるためには、①自信を育てること、②英語を使う目的を明確にし、動機を高めること、③不安感を軽減すること、の 3 点が重要になります。

3. 自信を育てる

英語が得意な子どもが自分の英語力に自信をもつことは自然なことです。教師にとってより重要なのは、あまり英語が得意ではない子どもたちが自信をもてる場面を、授業の中にどのように用意するかです。

授業中の活動をひとつの大きな挑戦として提示するのではなく、スモール・ステップの連なりとして組み立てることが大切です。活動の途中で教師がこまめにフィードバックを行い、子どもたちが自分の成果を確認できるようにすることで、「少しできるようになった」という感覚をもちや

すくなります。

活動を組み立てる際には、表 1 に示すように、「教師の支援」「児童に求める力」「授業形態」という 3 つの視点から、児童にかかる負荷を調整することができます。例えば、同じ活動であっても、教師のモデル提示がある場合とない場合では難易度が変わります。また、「聞く・見る」活動から「自分で言う・書く」活動へと進めることで、子どもたちは段階的に挑戦することができます。このように、活動の負荷を少しずつ高めていくように調整することで、英語が得

意ではない子どもたちも安心して活動に参加しやすくなります。最初は負荷の軽い活動から始め、全体で確認した後に、小集団の活動へと移行していくことで、子どもたちは段階的に活動に慣れていくことができます。同じ活動を繰り返す中で、「前よりできた」という感覚をもてることは、英語への自信を育てる大切な経験になります。その際、最後に小さな成功体験が残るように活動を終わることも重要です。「できなかった」で終わるのではなく、「少し言えた」「友だちに伝わった」という実感をもてることで、次の活動に取り組む意欲につながっていきます。

4. 動機を高める

活動が自分とは関係のない遠いものではなく、自分ごと (personalization) として捉えられたとき、子どもたちのやる気は高まります。場面設定が明確であり、英語を使う目的がはっきりしていると、子どもたちは「英語を使ってみたい」「活動に参加してみたい」と感じやすくなります。

例えば、買い物の場面であれば、単に “I’d like two carrots.”

5. 不安感を軽減する

特に高学年の子どもたちにとって、同級生の前で英語を使うことは、「失敗するかもしれない」という不安につながりやすいものです。

この不安を軽減するためには、子どもたちをいきなり大きな発表の場に立たせるのではなく、安心して英語を使える段階を用意することが大切です。例えば、活動を繰り返す中で少しずつ自信をもてるようにしたり、全体、グループ、ペアなど活動形態を変えながら練習する機会を設けた

6. おわりに

子どもたちの「英語で伝えたい」という気持ちは、単に英語表現を多く教えれば自然に高まるものではありません。英語を使っても大丈夫だと思える安心感、少しずつできるようになっているという自信、そして「これを伝えたい」と思える目的や相手があってこそ、その気持ちは育っていきます。L2 WTC の視点から見ると、子どもの発話は、語彙や文法の知識に加えて、教室の雰囲気、活動の組み立て、

表 1. 活動の負荷を調整する 3 つの視点

教師の支援	児童に求める力	授業形態
○モデル提示 あり	○聞く・見る	○クラス全体の活動
	○まねる (言う・動く)	○グループ活動
	○意味を推測する	○ペア活動
○モデル提示 なし	○理解する	○個人発表・個人活動
	○自分で言う・書く	

※下に行くほど、児童にかかる負荷が高くなる。

と言うだけでなく、「1,000 円の予算内で、野菜中心の夕食を作るために買い物をする」という設定にすると、活動への本気度が高まります。このように、現実味があり、自分の日常生活とのつながりが見える場面を用意すること、そして本当に言いたい内容を自分で選べるようにすることは、子どもたちの動機を高める大きなヒントになります。

りすることで、子どもたちは段階的に本番に近づいていくことができます。さらに、タブレット端末を活用すれば、自分の発話や発表を動画で確認し、改善のポイントを把握した上で本番に臨むこともできます。

こうした段階的な学びの場を計画的に設計することは、教師の重要な役割のひとつです。子どもたちが安心して挑戦し、自信をもって発表に臨めるよう、適切な足場を用意することが求められます。

教師の支援によって大きく左右されます。だからこそ、教師は子どもたちに「何を言わせるか」だけでなく、「どのような気持ちで言えるようにするか」を考える必要があります。子どもたちが英語で伝えようとする瞬間を支える授業づくりこそが、これからの小学校英語において大切な視点になるのではないのでしょうか。

〈参考文献〉
MacIntyre, P. A., Clément, R., Dörnyei, Z., & Noels, K. A. (1998). Conceptualizing willingness to communicate in a L2: A situational model of L2 confidence and affiliation. The Modern Language Journal, 82(4), 545-562. <https://onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1111/j.1540-4781.1998.tb05543.x>
MacIntyre, P. D., & Charos, C. (1996). Personality, attitudes, and affect as predictors of second language communication. Journal of Language and Social Psychology, 15(1), 3-26. <https://doi.org/10.1177/0261927X960151001>

「伝えたい」「伝えられそう」「伝わった」を育む授業

外国語の授業で子どもの「伝えたい」を育てるには、どのような言語活動や教師の働きかけが有効なのでしょう。日々の実践をもとにした具体的な手立てを、来住野実咲先生にご紹介いただきます。



来住野実咲(きしの・みさき)

東京都小平市立小平第十一小学校主任教諭。学級担任を経て、現在外国語専科。子どもが本気で思いを伝え合いたくなる授業を目指し、日々実践に励んでいる。

1. はじめに

現行の小学校外国語科の学習指導要領では、言語活動を通してコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成することが目標とされています。授業の中心となるのは言語活動です。言語活動を通して、「伝えたい」という意欲、「伝えられそう」という自信、「伝わった」という達成

感を育むことが「主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度」の育成につながります。本稿では、子どもの「伝えたい」「伝えられそう」「伝わった」を育てる指導について、私の日頃の実践を紹介します。

2. 子どもの「伝えたい」「伝えられそう」「伝わった」を育てる授業づくり

◆「伝えたい」という意欲を引き出す

子どもの伝えたい気持ちを高めるには、児童理解に基づき、子どもが「伝えたい」と思う目的・場面・状況を設定して言語活動を行うことが大切です。

“I want to go to”などの表現を使って、行きたい国とそこでしたいことを伝え合う単元を例に考えてみましょう。例えば「宝くじが当たったらどの国に行きたい?」というように、目的・場面・状況を工夫することで、言い甲斐が生まれ、子どもの英語で表現しようとする意欲を高めることができます。

T: I bought a *takarakuji* ticket yesterday.

もし当たったら、みんなで旅行に行こうよ!

S: やったあ!

T: 行き先はどこがいいかなあ...

I want to go to France.

Where do you want to go?

S: イタリア!

T: Oh, you want to go to Italy. I want to go to France.

また、国の話題だけでなく、同じ表現を使って、子どもにとってより身近な話題を設定することもできます。

T: We had the sports festival last week.

もしみんなで打ち上げに行くとしたら...

I want to go to ○○ restaurant.

Where do you want to go?

S: □□公園!

T: Oh, you want to go to □□ park.

I want to go to ○○ restaurant.

子どもが内容を伝えたいという思いをもって言語活動に取り組むためには、日本語でも思わず話したくなるような話題を選ぶことがポイントです。目標の表現を基に、目の前の子どもの実態に合わせて、その表現が生きて使われる話題や目的・場面・状況を工夫することが大切です。

◆「伝えられそう」という自信を育てる

「伝えたい」と思っている、「自分には難しい」と感じているは英語での発話につながりにくなります。そのた

め、子どもが安心して学習できるようスモールステップの指導が必要です。以下に具体的な指導の流れを紹介します。

(1) 意味を考えながら、聞き慣れる段階

まずは「聞くこと」からはじめます。言語活動の中で、子どもは指導者の話を聞き、「行きたい場所について話しているな」「I want to go to」と言うのだな」と意味と音を結びつけていきます。そして、意味を理解した状態で、目標の表現をたっぷり聞き、慣れ親しみます。この段階では、子どもはうなずいたり、日本語や単語レベルで応答したりすればよく、英語での発話を急がせないようにします。

T: I want to go to France. Where do you want to go?

S: インド!

T: Oh, you want to go to India. I want to go to France.

発話の段階へと進む前に、「英語だったけれど先生の話の意味がわかった!」という成功体験を積み、目標の表現に十分聞き慣れます。この「聞き慣れ」が話すことの土台となり、後の「伝えられそう」という自信につながります。

(2) 目標の表現に言い慣れる段階

目標の表現に聞き慣れてきたら、今度は言い慣れる時間を設けます。例えば、以下のような活動を行います。

表現の意味を考えながら繰り返して言う活動

T: 自分にあてはまることだけ繰り返して言おう。

I want to go to France. (指導者が言う)

S: I want to go to France. (該当者が繰り返して言う)

◆ 「伝わった」という達成感をもたせる

自分の考えや気持ちが実際に「伝わった」という達成感が、もっと伝えたいという気持ちの原動力となります。

私たちは授業の中で、子どもの発話に対し、“Good job!”などの評価的な応答をすることがあります。このような声かけによって、子どもは「よかった、正しく言えた」と感じられるでしょう。しかし、評価的な応答ばかりが続くと、思いを伝え合い、わかり合うというコミュニケーション本来のおもしろさや魅力が損なわれてしまいます。そこで言

3. おわりに

本稿では、子どもの伝えたい気持ちを高めるための具体的な指導例を紹介しました。全ての指導場面において共通して意識していることは、ことばを大切に使うことです。ことばを使い合うことは、意味内容のやり取りをすることです。ことばが生き生きとする文脈の中で、指導者が心を込めて自分の思いを話し、子どもの思いを丁寧に受け止めることが、子どもの伝えたい気持ちにつながります。

この活動では、機械的な音声練習にならないように注意します。「自分にあてはまることだけ」のようなお題を設定することで、子どもは意味を考えながら言い慣れていきます。また、次のような活動を行うこともあります。

自分のペースで言う「ひとりごと」の活動

T: 願いが叶うように、一人でこっそり念じてみよう。

S: I want to go to France / Italy / India. (各々言う)

こうした活動を通して、子どもは目標の表現に言い慣れ、「伝えられそう」という感覚を高めていきます。この段階では、机間指導や中間指導を通して、一人一人の不安感に寄り添いながら指導するように心がけています。

(3) 自力でことばにして伝える段階

目標の表現に聞き慣れ、言い慣れたら、自分の考えや気持ちを自力でことばにして伝える段階に進みます。この段階では一人一人に発話させますが、(1)、(2)の段階で十分な指導や支援を行うことで、安心感をもって表現しようとする姿が見られるようになります。

(1)～(3)のどの段階においても、子どもが「聞きたい」「伝えたい」という意欲をもって取り組めるよう、目の前の子どもに合った話題を設定し、英語でのおしゃべりを楽しむ気持ちで指導することを大切にしています。

語活動では、子どもが「伝わった」という達成感を得られるよう、「へえ、そうなんだね」と子どもの発話の意味内容を受け止めながら応答することを心がけています。

S: I want to go to Brazil.

T: Oh, you want to go to Brazil. Do you like soccer?

S: Yes, I do!

「伝わった」という経験の積み重ねが自信となり、さらに「もっと話してみたい」「別のことも伝えたい」という新たな意欲へとつながっていきます。

最後に、留意したいことは、必ずしも英語で伝えられるようになってから言語活動を行うわけではないということです。言語活動を通して、指導者とのやり取りの中で、少しずつ「伝えたい」「伝えられそう」「伝わった」を育てていくことが大切です。

子どもが英語で考えや気持ちを伝えたい授業を、ともに目指していきましょう。

Tips for Activities!

やってみよう
英語活動

「子どもたちが夢をもって中学校へやってくること」をめざして

中学校の教員である赤枝康隆先生は、小中連携をめざした出前授業を実践しています。英語の絵本の読み聞かせや名前のイニシャルを書く活動を通して、子どもたちの中学校での英語学習への期待を高める取り組みを紹介します。

私は中学校の教員ですが、小学校での出前授業も行っています。その目的は、「子どもたちが夢をもって中学校へやってくること」です。そのために継続的に実践している取り組みを紹介します。

①「読むこと」(英語の絵本の読み聞かせ)

オリジナルのストーリーを用いた絵本「Toro's Story ~ Magic Tree Adventure ~」を活用しています。すべてのエピソードを読み聞かせるのではなく、ある程度の部分までを読み聞かせ、続きは中学校に入学してから自分で読んでみたいと思えるような展開にしています。絵本は中学校の図書室にそっと置き、中学校入学後に子どもたちが探して読めるようにしています。

授業では、絵本の挿絵を見せながら、英語を読み聞かせます。子どもたちは挿絵を見ながら教師と一緒に何回か音読をします。それぞれの場面で、内容について子どもたちに質問をし、次にどのような展開になるかを推測させます。

②「書くこと」

名前のイニシャル(アルファベット2文字)を書きます。有名人がファンにサインを書いている場面を見せ、将来、自分が有名になったときのために、英語でサインの練習をしようと誘い、自分のイニシャルを書くことへの意欲を高めます。自分の名前のイニシャルであるアルファベット2文字は、自分にとって特に大切な文字として大事にしてほしいというメッセージも伝えています。

③ ふりかえりシート

・「読むこと」…絵本の内容をどの程度理解できたかを確認します。

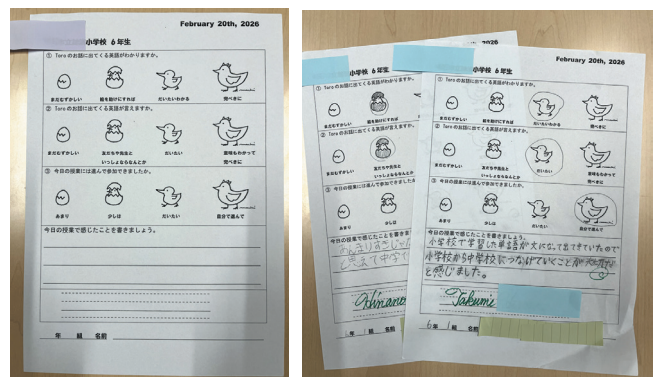
・「書くこと」…自分のイニシャルの清書をします。

→私が子どもたちの名前を「筆記体」で書き、簡単なコメントを添えて返却します。

シートが返却されると、子どもたちは早速なぞって練習しているようです。英語の文字への関心を高める工夫のひ

とつであり、将来の夢や希望をもって、意欲的に中学校に入学してくれる子どもたちが増えることを願っています。

中学校の入学式では、小学校の出前授業での学びにつながるエピソードとして、「今日は夢をもってきましたか」と子どもたちに問いかけています。子どもたちの目がまぶしいくらいに輝いています。



ふりかえりシート

Classroom English

○ Let's read together.

「一緒に読みましょう」

○ Show me your initials.

「(書いた) イニシャルを見せてください」

〈参考文献〉

小野尚美・田縁真弓・オーガスティン真智・吉本連 (2022) 『小学校英語とストーリーテリング—絵本の読み聞かせに始まる指導案・活動・評価』 研究社。
田縁真弓 (作)・オーガスティン真智 (絵) 『Toro's Story ~ Magic Tree Adventure ~』
(上記『小学校英語とストーリーテリング』ダウンロード資料)



赤枝康隆(あかえだ・やすたか)

兵庫県明石市立魚住中学校校長。小中連携に興味を持ち、小学校と連携した外国語(英語)の授業を行う。現任校では、幼稚園と小学校で出前授業を行い、校区の子どもたちに夢を配り続けている。

Q&A

「ふりかえり」の指導

HPでは、ほかにもさまざまな質問やお悩みにお答えしています。ぜひご覧ください。



ふりかえりの記述が「楽しかった」「難しかった」で終わってしまいます。

授業・単元のまとめとしておこなう「ふりかえり」は、児童にとっては「学習を記録しておくもの」であり、教師にとっては「評価のための材料」です。ふりかえり用紙の作成にあたっては、このことを教師が認識しておくことが重要です。

児童にとってふりかえりは「学びっぱなしにしない」ための、「知識や思考の深まりの変化」に気づき、言語化しておくための記録です。「今回の授業の〇〇の活動で第1時よりも理解できたこと」「(見えてきた)自分の課題」を記録しておくことで、児童自身が自らの理解の深まり方や強み・弱みを把握し、自己調整を促すことができます。児童が学びの変化を言語化しやすくするために、ふりかえりに取り組ませる際に、「今日のやり取りを通して、自分が新しくわかったこと」「言語材料が言えるようになるために自分で取り組んだこと」など、教師が項目を挙げたり、中学年には「わたしがわかったことは_____です」のように書き出しを示して記述させたりすることが効果的です。

何ができるようになったかを
書けるように、
教師がふりかえりの観点を
示すことが大切です。



教師にとってふりかえりは、授業中の行動観察やワークシートの取り組みなど客観的に評価したことと、児童がふりかえりで書いた内容に大きなずれがないかを確かめたり、行動観察では見取れなかった児童の学習への態度を把握したりするための手がかりになります。前述のように、児童にふりかえる項目を提示することは、教師にとって見取るべき児童の行動や態度に焦点を当てやすくします。

時間が十分に取れない場合はリッカード尺度のような5段階で○をつけるだけのセルフアセスメント形式のふりかえりのみの場合があってもよいですが、単元の最後には必ず児童の知識と思考の深まりを記録する「ことばでの学習記録」を行いましょう。

増淵真紀子(ますぶち まきこ)

明星大学非常勤講師。TESOL 修士。元小学校外国語専科講師。東京大学大学院教育学研究科博士課程にて、第二言語習得に基づいた Young learners のための Focus on Form 指導法の効果について研究している。J-SHINE 小学校英語上級指導者の資格を所有し、2021 年より Instagram, YouTube でまき先生として小学校英語の授業アイデアや教材、教授法をシェアしている。



世界の風景

マデイラ島 (ポルトガル)



ポルトガル語で「木」を意味する、マデイラ島。首都のリスボンからおよそ 1,000km 離れた、大西洋に浮かぶ島です。「大西洋の真珠」と言われ、年間を通してヨーロッパ各地から多くの観光客が訪れます。海のイメージが強い一方で、山並みが連なる地形と豊かな緑にも恵まれています。16 世紀には、農地へ水を運ぶための灌漑水路「レバダ」が築かれ、総延長 1,000km 以上にわたり、人びとの暮らしを支えています。

表紙は、マデイラ島の豊かな自然環境で暮らす子どもたち。私が訪れた「マデイラ・インターナショナルスクール」では主に英語・ポルトガル語での授業が行われています。海外からの

移住者も多いこの島では、子どもたちのルーツも実にさまざま。学校で流行っているという「おりがみ」の作品を嬉しそうに見せてくれました。

教育では、「誠実さ」と「礼儀正しさ」が重視されています。嘘をつかず、正直でいることの大切さを、多くの親たちが語っていました。子どもたちは、休日に楽しむマリンスポーツなどを通して、島の自然とともに生きる知恵や感覚を身につけていくようです。

ERIKO(えりこ)

モデル・定住旅行家。国内外の家庭に滞在し、現地の暮らしや文化を発信。東京家政大学非常勤講師。とっとりふるさと大使。著書多数。
WEB : <https://erikok1116.official.ec/>



辞書の三省堂が新中学生へ贈る、新たな学びのパスポート！

三省堂の名入れ辞典

令和7年度改訂の全中学校 英語教科書に対応！

オンライン辞書「ことまな+」付き！



紙 + デジタル

1人1台端末の時代に
辞典を購入すると、オンライン辞書が
無料で使える特典付き！（2025年4月1日サービス開始）

紙でも、PC、タブレット、スマホでも同じ内容が引ける！

個人情報の登録不要！

ID 設定と辞典クイズに答えるだけで、すぐ使える！

➕ プラス！和英インデックス ➕ プラス！辞書活用ガイド



紙でも

デジタルでも

お求めやすい価格の
卒業記念用特製版
をご用意しております。

ジュニアクラウン 中学英和辞典 第15版 特製版
ジュニアクラウン 中学和英辞典 第12版 新装版 特製版

田島伸悟・三省堂編修所[編] B6判 オールカラー 832ページ ISBN:978-4-385-10809-4
田島伸悟・三省堂編修所[編] B6判 オールカラー 640ページ ISBN:978-4-385-10845-2

定価 **1,300円** (本体 1,182円+税10%)
定価 **1,300円** (本体 1,182円+税10%)

卒業記念サービスの詳細・申込方法はこちら…<https://www.sanseido-publ.co.jp/sotuki.html>



LINE

三省堂 小・中学校 教科書
LINE 公式アカウント
はじめました！

授業のお役立ち情報を
定期的に配信中！



三省堂 〒102-8371 東京都千代田区麹町5-7-2

三省堂 教科書・教材サイト <https://tb.sanseido.co.jp/>

※この冊子は、一般社団法人教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」に則って配布しております。